

2022年度 神戸教区神学塾（信徒の神学）No.4

— イエス様はフーテンの寅さんみたい？ —

司祭 フランシス 小林史明

（序）カトリックの米田彰男神父著「寅さんとイエス」「寅さんの神学」

今から10年前、筑摩書房から「寅さんとイエス」という本が出版されました。書いたのはカトリックの神父で当時清泉女子大学教授だった米田彰男司祭。そして最近オリエンス宗教研究所から「寅さんの神学」も出されました。また、私が説教学を学んだ関田寛雄牧師（青山学院大学教授・当時）は、日本キリスト教団の「信徒の友」という雑誌に、寅さんが主演の「男はつらいよ」の映画監督山田洋次さんと対談され、説教学の授業の合間も寅さんの映画の話がよく出ていました。

第3回のテキストでは、主に旧約聖書の成り立ちについて話しましたが、今回は新約聖書。それも第2回で触れた、私たちが模範とすべきキリスト、イエス様はどんな方で、具体的にどんな教えを語られたのか。伝統的な福音書の理解やたとえ話などを見直してみたいと思います。それと寅さんがどんな関係にあるのかも、少し考えてみましょう。

（1）イエス様の生涯を描いた福音書は聖書の中に4つある。

新約聖書の最初にはマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネという4つの福音書があり、それぞれイエス様の生涯（生涯と言ってもほとんどが30歳を超えての伝道活動）が、描かれています。他にも福音書と呼ばれるものはたくさんありますが、正典になったのはこの4つで、それぞれ、「人」「獅子」「牛」「鷲」のシンボルがついています。これは、旧約聖書のエゼキエル書1章10節に「その顔は人間の顔のようであり、四つとも右に獅子の顔、左に牛の顔、そして四つとも後ろには鷲の顔を持っていた。」とあり、ひとつの生き物に4つの顔があって、その生き物が4匹いたのですから、顔は16あったのでしょね。これが新約の最後、ヨハネ黙示録4章7節では、独立して出てきて、「第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は若い雄牛のようで、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空を飛び鷲のようであった。」となっています。顔の順番がエゼキエル書とはちがいますが、これらと、4つの福音書の第1章とは、関係があると後の学者は主張します。



ST. MATTHEW THE EVANGELIST
マタイ (A.P.M.)

人の姿をしたのは、福音記者マタイ。9月21日が「福音記者使徒聖マタイ日」ですね。伝統的には使徒（十二弟子のひとり徴税人）マタイがこの福音書を書いたと言われていますが、おそらく別の人だったと思います。さて、どうしてマタイが人なのか。それはマタイ1章には、最初にアブラハムから、マリアの夫ヨセフまでの系図として、人の名前ばかりがならんでいるから、と説明します。この福音書は、旧約聖書をよく読んでいた、ユダヤ人に向けて書かれた書物であろうと言われていいます。系図の最初にアブラハムがあるのもユダヤ人の父祖だからです。そして、しばしば「主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった」（1：22）という表現がこの後もよく出てくるのがマタイ福音書の特色です。成立したのは紀元80年代頃。



ST. MARK THE EVANGELIST
マルコ (M.)

獅子（ライオン）の姿をしたのは、福音記者マルコ。4月25日が記念日ですね。でも、どうしてマルコが獅子なのでしょう。学者のこじつけではないかと思いますが、マルコ福音書は最初に預言者イザヤの書が引用されて、3節目の「荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』』という言葉があります。これを語ったのはイエス様より半年早く生まれた、洗礼者ヨハネ（誕生日は6月24日）ですが、荒れ野で叫ぶということで、獅子（ライオン）にむすびついたのでしょう。この福音書が4つのうちで一番早く書かれましたが、それは最後の晩餐の時の場所がマルコの家であり、マルコは使徒言行録に出てくる使徒バルナバのいとこであり、パウロとも親交があったので、イエス様の生涯をまとめる資料をたくさんもっていたのではないかと、言われたりします。成立したのは一番早く、紀元60年代。



ST. LUKE THE EVANGELIST
ルカ (M.)

牛の姿をしたのは、福音記者ルカ。10月18日がルカの記念日です。ルカは4人の福音記者の中で唯一異邦人だろとうと言われていいます。ルカ福音書1章には、洗礼者ヨハネの誕生が語られ、彼の父ザカリアは祭司で、神様に献げ物をするのが仕事でした。それで、犠牲の献げ物と言えば第1に牛ということになるので、ルカのシンボルが牛だというのはのですが、これもこじつけでしょうか。3章にはヨセフからアダムまでの系図が並びますが、ルカは異邦人らしく、世界の創造まで意識し

ているのでしょう。伝道者であるパウロに従って、彼の活動を細かく記録し、ルカ福音書の続編である使徒言行録の著者でもあります。紀元80年代に成立とされています。



ST. JOHN THE EVANGELIST
ヨハネ (AP)

さて、最後は福音記者ヨハネです。記念日は「福音記者使徒聖ヨハネ日」として、12月27日に、彼だけは白の祭色で祝われます。他の使徒や福音記者が迫害で殉教する中、彼だけは天寿を全うした、ということになっています。ただし、マタイ同様、十二使徒のヨハネがこの福音書や3つの手紙、そして黙示録まで書いたのかどうかは、疑問視されています。この福音書は冒頭から「初めに言があった」という崇高な書き方で始まる、世を鳥瞰したような表現なので、空高く飛ぶ鷲がシンボルになったとされています。成立したのは一番遅く、紀元90年代頃だそうです。

(2) イエス様はどのように生まれたか

クリスマスには、ヨハネ福音書の冒頭部分が読まれますが、頭に浮かぶ誕生場面としては、マタイとルカが下敷きになっています。ナザレに住んでいるマリアさんに天使がお告げをする。マリアとヨセフが旅をして、ベツレヘムに着くが、宿屋はいっぱいで泊るところがないため、馬小屋で泊り、出産した。この出来事を聞いた羊飼いたちは、馬小屋の飼料おけに寝かされた幼児を見に来る。そしてはるか東の国の占星術の学者たちが黄金、乳香、没薬を持って、幼子を礼拝するためにやって来る、という話ですね。

ところが、東の国の学者が来た話だけは、ルカではなくマタイからとられています。それに、マタイでは、お告げを受けるのはヨセフの方です。そしてヨセフとマリアは、最初からベツレヘムに住んでいて、自宅で出産した。馬小屋なんて出てきません。2章11節には「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。」とあります。ヨセフとマリアはベツレヘムに旅してきたのではありません。旅はこれから始まるのです。ヨセフは夢で主の天使のお告げを受け、ヘロデ王が死ぬまで、エジプトで生活します。ルカ福音書では、生まれて8日目にイエスと名づけられ、清めの期間が終わったら両親はエルサレムの神殿へ宮参りに行って、楽しいクリスマスの一連の話が終わります。しかし、マタイの方は悲劇の誕生物語でしょう。長年住み慣れたベツレヘムから、見知らぬエジプトへ旅をする。ベツレヘムでは2歳以下の男の子は殺されます。やがてヘロデが死んでからも、ヘロデの息子アケルラオが跡を継いだと聞き、ベツレヘムに帰るのではなく、「ガリラヤ地方に引き

こもり、ナザレという町に行って住んだ。」(2:22~23)と書かれています。

(3) さて、実際はどうだったのか？

ルカによれば、ナザレからベツレヘムへ旅をして馬小屋で出産。またナザレに帰るが、宮参りのため、また楽しい旅をして幸せな日々。マタイでは、ベツレヘムを追われるように、命からがら、エジプトへ行き、王が死んでも、故郷ではなく、田舎のナザレに移り住む。生まれて8日目の命名や割礼をする余裕はなかったか。エルサレムの神殿へ宮参りなどとても考えられなかったはずだ、ということになります。

1980年、田川建三という新約の先生が「イエスという男」という本を出し、2004年には増補改訂版が出ました。これは日本だけでなく世界のキリスト教界に衝撃を与えました。そして伝統的なキリスト教に対し疑問を投げかけて、高い評価を受けています。

田川先生によると、イエス様の誕生がベツレヘムだったというのは、イエス様が十字架にかかってから50年後に言われ始めたことであって、マタイやルカの福音書には影響があるが、それより前に書かれたマルコ福音書の著者やたくさんの手紙を書いたパウロなどは、そんな作り話は知らなかっただろう。ユダヤ人で最高に評価されているダビデ王を手本として、救い主もベツレヘムで生まれることにしたい、ミカ書5章などの影響で創作されたものだろう、ということです。

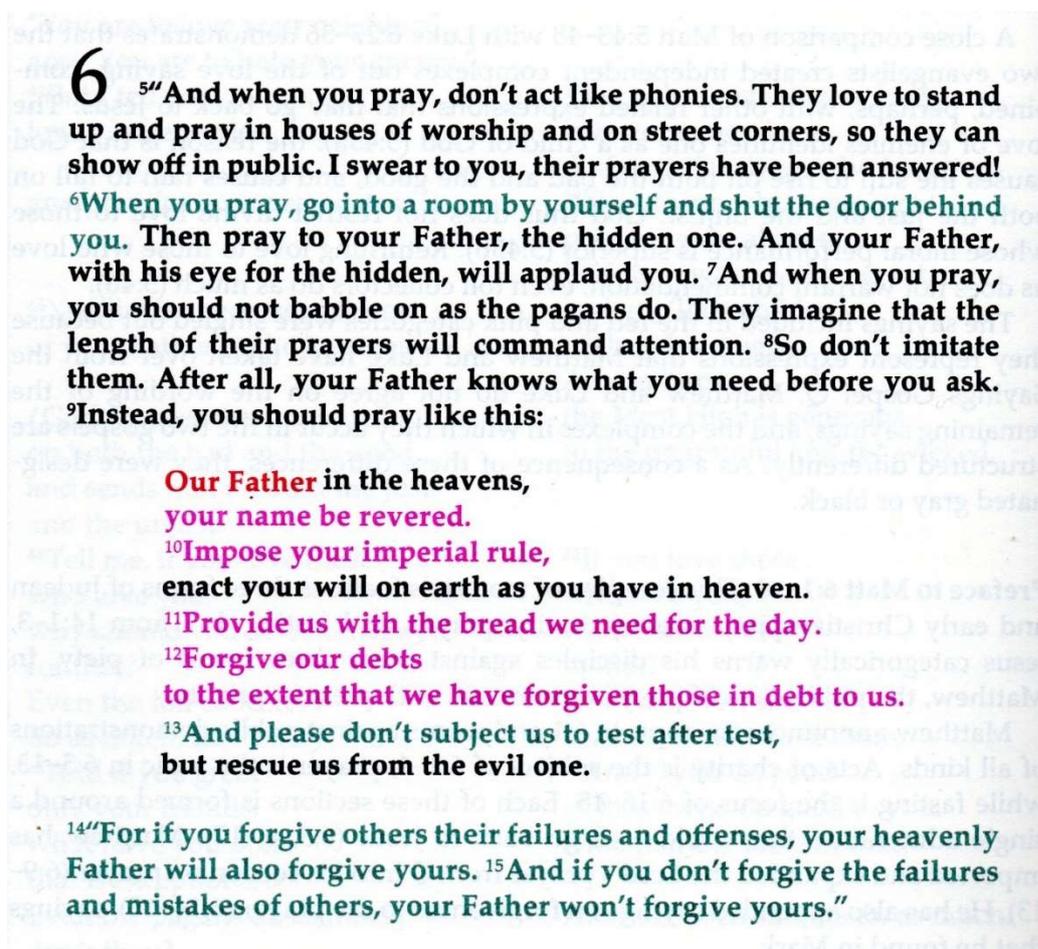
また、ユダヤ人のために書かれたというマタイ福音書の注解書などを見ますと、束縛からの人間の解放をテーマとする旧約の英雄モーセの出生に似せて、権力者が、「男の子が生まれると殺す話」をイエス様にも反映させ、また、モーセのような指導者は、エジプトから脱出する、という話に結び付けるため、ヘロデ王の迫害を逃れてエジプトに下り、そこから約束の地カナンに帰ってくる、という想定をしたのではないか、ということです。

一方ユダヤ人だけでなく世界の救い主と考えるルカの福音書では、イエス様の誕生を祝う天使たちの声から始まり、天の大軍の大合唱になるのですが、これも後代の創作。

実際には「ナザレのイエス」と言われるように、ナザレでヨセフとマリアの普通の夫婦の普通の子どもとして、生まれ育っただろう。ベツレヘムとは全く関係がなかったと思われる。処女降誕も東の国の占星術の学者の話も、イエス様を偉大な王、救い主として作り上げるための創作にすぎなかった、というのが実際のところであろう。そうでないなら、成人するまでにいろんな障害があらわれて、大人までなれたかどうかわからない。だから、イエス様は30歳になるまで、無名の人物なので、その誕生など記録に残るはずがなかつ

たろう。イエス様が注目を浴び、紀元30年4月7日に処刑されてから、だんだんと神格化が進んでいったのではないか。紀元50~60年頃にはまだ、非業の死を遂げた宗教家だったが、80年代には、出生場所や処女降誕などの尾ひれがついて、福音書に描かれたイエス様の姿は、実際にイエス様が主張し行動されたことからかけ離れた、大変脚色されたものではないか、という見方が、出てきました。そして、福音書のイエス様の言葉や行動は、実際のイエス様の実像とどれくらい離れているか、20世紀の終わり頃、欧米の新約学者たちが投票によって、4つに分類した本が出ました。1993年に「ファイブゴスペルズ（5つの福音書という意味。20世紀になって発見されたトマス福音書という貴重な資料が4つの福音書に追加して5つの福音書になって投票の対象になった。）」を出版。これはイエス様の語られた言葉を対象としたものです。その5年後、1998年に、今度は同じ人たちがイエス様の行動について投票し、「アクツ・オブ・ジーザス（イエス様の行動）」という本を出しました。

ファイブゴスペルズの、マタイ福音書6章5節からの主の祈り部分を見てください。



ここには、4つの分類が全部入っています。

赤・・・きっとこのような言葉をイエス様が言われただろう。

ピンク・・・おそらくこれに近いことをイエス様は言われただろう。

青緑色・・・イエス様の言葉そのものではないが、何となくイエス様の香りがする。

黒・・・これはイエス様の言われたことではなく、後代に教会が創作したものだろう。

これを見ると「わたしたちの父よ」は、確かにイエス様が言われたが「天におられる」は後の時代に教会が加えたものだろう。ということになります。「御名が崇められますように。御国が来ますように。」「わたしたちに必要な糧を今日与えてください。わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。」などはイエス様らしいけれど、その間の「御心が行われますように、天におけるように地の上にも。」は後の時代の加筆。「わたしたちを誘惑に遭わせず、」は何となくイエス様が言いそうだけど「悪い者から救ってください。」はイエス様の発言ではないだろう、という結論。

これは、福音書に書かれているものを現代の新約聖書の学者たちが投票して分類したものです。私たちが礼拝の時などに唱える言葉とは違います。また、「わたしたちの父よ」とだけ唱えたらいいと言いたいのでもありません。

イエス様がこの世を去られたあとに書かれた新約聖書では、教会のいろんな伝統の中で脚色されているため、私たちの模範とすべきキリスト像、イエス様の真の姿をとらえるためには、このような研究も大切だということです。

(4) 最高ランクのたとえ話を見てみよう

いちばん最初に書かれたマルコ福音書で、最高ランクをつけられているのは意外にも「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」(12:17) だけでした。しかし、他の福音書の中で、有名なたとえ話のいくつかは最高ランクになっています。

「ぶどう園の労働者」のたとえ(マタイ20章)、「善いサマリア人」(ルカ10章)、そして「不正な管理人」のたとえ(ルカ16章)などです。聖書の小見出しに「善いサマリア人」のあとに「のたとえ」という字が入っていないのは、実際に起こった出来事の可能性があるようで、作り話とは断言できないから、と聞いたことがあります。そんな中で、イエス様の気持ちをよく表している、と言われる「ぶどう園の労働者」のたとえを見てゆきましょう。これからあとは、色分けしません。

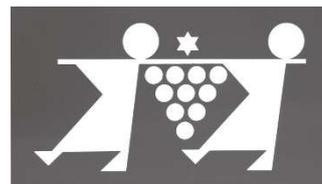
(5) 「ぶどう園の労働者」のたとえ

人が人を支配するのではなく、人間はみんな平等に尊重されなければならない、というイスラエルの成立（第3回のテキスト参照）や、神様の御心を示すためにイエス様が語られた、代表的なたとえ話です。実は私が神学校の説教学で説教演習の時に指定された福音書で、説教したあと、指導してくださった関田先生（前出の寅さんのファンの先生）から、「この説教は大切にしてください」と、意外にも褒められ、3年毎に説教するたびに、少しずつ改良をしています。A年の特定20の福音書です。2020年に説教した文から引用します。（蛇足ですが、関田先生は2022年12月14日、94歳で逝去されました）

説教題 1 デナリオンを喜ぶ

今日の福音書は、私にとっては神学校の学生の時、説教演習で担当させられた箇所でした。ですから、とても印象深く、また、これは、神様の愛をよく伝えているたとえ話だと思います。有名な話ですが、改めて物語の背景と、あらすじを見ていくことにしましょう。

イスラエルは、果物が豊富にとれる国ですが、中でも、ぶどうは代表的な果物で、ふたりの人が、豊かなぶどうを棒にかけて運んでいる絵が、イスラエル観光局のシンボルになるほどです。ぶどうの収穫は秋の楽しい行事ですが、秋が深まって雨が降るようになると、ぶどうの皮が水分を吸って破れてしまうので、急いで取り入れなければなりません。そこで、ぶどう園の主人は、猫の手も借りたいくらいの忙しさで、たくさんの労働力を必要としますから、日雇いの労働者を収穫のために採用するのです。普段羊飼いをしている人々も多く雇われたと思います。



最初の人々は夜明け頃に雇われたわけですから、朝6時ということになるでしょう。その時は、主人は、1デナリオンという、当時一日分の賃金として一般的だった値段で契約しました。ところが、朝雇った人たちだけではとても仕事が終わらないと判断して、9時から、12時から、そして3時からというふうに、次々と雇います。その時の主人の言葉は、「あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう。」というものでした。

ところが、夕方の5時という、もうあと1時間しか時間がないのに、この主人は、それから人も雇います。ただし、この時は、「あなたたちもぶどう園に行きなさい。」と言

ますが、いくら払ってやろう、というお金の話はしていません。

ここまでは、よくあるぶどう園の主人の、人を雇う話です。ところが、この後で、このぶどう園の主人は変な行動をします。賃金の支払い方です。私たちは、この主人のやり方に、素朴な、ふたつの疑問を抱きます。

一つは、もちろん、朝から働いた人にも、9時からの人も、12時から、3時から、そしてたった1時間しか働かなかった5時からの人にも、同じ1デナリオンの賃金を払ったことです。このような気前のいい支払いをしていたら、普通の企業ですと、会社がつぶれてしまいます。どうして同じ金額を支払ったのか、というのが、最初の、そして最大の疑問です。

そして、二つ目の疑問は、どうして、支払う時、最後に雇われた者から支払い始めたのか。最初から働いた者が最後になったのか、という疑問です。同じ金額を払うにしても、長く働いた人に最初に渡すのが、一番問題が起こらない方法のように思えます。朝から働いた人に、1デナリオンずつ払い、その人たちが帰ったあとで、9時からの人、12時からの人、とだんだん渡してゆけば、5時から働いた人に1デナリオン渡しても、その人たちが黙っていれば、問題は起きなかったと思うのです。

この疑問に対する答えとして、私なりのもうひとつのたとえ話

この疑問に、別のたとえで答えるとしたら、ある家庭で、5人兄弟がいて、学校からテストの成績を持って帰ってきた時の話を、あてはめることができるでしょう。5人の兄弟が、上の方から順番に、お母さんにテストの点数を見せに来た、ということにしましょう。

長男は、100点のテストを持って帰りました。「よくやったねえ。今日はごちそうを一緒に食べよう。」と言って褒めてやりました。次男が次に入ってきます。何点でしょうか。75点ですね。「ああ、がんばったね。夕食まで遊んできなさい。」と言う。それから、3男が50点。4男が25点。そして、末の5男が10点のテストを持って帰って、お母さんに見せたとしましょう。下になるほど、情けない顔をしていることでしょうね。末の5男などは、泣きベソをかいているかもしれません。

それじゃ、その夜、お母さんは、どうしたでしょうか。

成績の良かった長男に一番大きな肉を渡し、下になるほど、小さくなっていったでしょうか。それとも、下の5男に最初に、上等のお肉を渡し、下から順番に、みんな同じ上等の

お肉を渡して、「さあ一緒に楽しい夕食を食べましょう。私は、あなたたちがいい成績を取ろうと、悪い成績だろうと、あなたたちみんなを同じように愛していることを忘れないでね。」と言うのでしょうか。おそらく、どこの家でも、お母さんは、息子がみんな可愛いし、成績が悪くて泣きべそをかいている末の息子を最初に元気付けてやりたいと思うに決まっています。ぶどう園の主人の気持ちも、それと同じではなかったか、と私は想像するのです。

神様は平等に人を愛する

朝から雇われた人は、一日働くのですから、体は一番疲れているでしょうが、仕事が終わる頃、彼は1デナリオンの賃金ももらえるので、喜んで働いているでしょう。ところが、午後から雇われた人、特に、5時から1時間しか働かなかった人は、体こそ疲れていないかもしれませんが、主人はいくらくれるのか、その賃金のことは、何も話してなくて、ただ「あなたもぶどう園へ行きなさい。」という言葉しか言われていません。今夜は家族に何も買って帰ってやれない、と情けない思いで働いているだろうと思います。

この人は、働きたくなかったのではありません。働きたくても、「だれも雇ってくれないのです。」と言っていました。朝、声をかけられたら、その人は喜んで働いたことでしょう。やさしいぶどう園の主人は、誰よりも先に、この悲しい顔をして働いている、夕方1時間しか働けなかった人を、早く安心させてやりたかったに違いないと私は思うのです。

私たちは、「労働者と賃金の話」と聞けば、私たちの信仰による努力とそれに対する神様の報酬、というふうを考えて、たくさん努力した者には、たくさんの祝福が与えられる、と考えてしまいましたが、それはどうも間違っているらしい。

このたとえ話では、賃金が出てくるけど、神様が私たちに下さるものは、人間の努力とは全く違う、母親が子どもを愛するように、子どもの出来不出来とは全く関係なく与えられる、恵みだということです。それは他の言葉で言えば、神様は『悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる』（マタイ5：45）ということだと思います。

私たちは、それぞれ、神様から声をかけられて、クリスチャンになりました。子どもの頃から声をかけられた人もあるでしょうし、最近になってクリスチャンになった人もいます。その信仰生活はさまざまですが、お互いを競争相手にする必要はありません。みんな同じ1デナリオンを頂けることを喜ばしいのではないのでしょうか。そして、このぶどう園の主人のように、1デナリオンが人々に行き渡っているかどうか、心配しながら見回れる者

でありたいと思います。

イエス様も周りの人たちが、日雇いでその日の暮らしにも苦勞しているのを目の当たりにしたことでしょう。雇われるかどうかはその時の運によるかもしれないが、雇われなかった人は、憐みの対象ではなく、みんな平等にその日の生活を保障されるべきだ、というのがこの話の中心テーマだと思います。

(6)「タラントン」のたとえ(マタイ25章)をどう考えるか

ここまで、私がぶどう園の労働者の話をすると、きっと「タラントン」の譬えを持ち出して、反論する人もあるでしょう。A年特定28の福音書です。これもランキングとしては、上から2番目で、おそらくこんな話をイエス様がしたろうと学者たちが考えている信憑性の高いたとえ話です。主人が僕たちに自分の財産を預けて旅行に出かけた話です。3人の僕に力に応じて、5タラントン、2タラントン、1タラントンを預けて、旅に出ると、5タラントンや2タラントン預かった者たちは商売をして、それぞれ預かった金を2倍にしたが、1タラントン預かった者は、穴を掘って、隠しておいた、というお話です。

旅から帰ってきた主人は、2倍にした僕たちをほめて、昇進しますが、土に隠していた僕は、主人から叱られて、外の暗闇に追い出される、という有名な話です。

この「タラントン」という言葉は、金銀を量る重さの単位でしたが、このたとえ話などから「天賦の才能」という意味になって、現代ではタレントという「才能のある人」という風に受け止められています。そこで教会は、これを個人の賜物であるかのように受けとめて、「賜物を生かして仕え合いましょう」みたいなスローガンになっています。そして、資本主義社会を発展させるための根拠ともなっています。日曜学校などでも紙芝居「おはなばたけとしょくどう」というのを子どもたちに見せて、「犬のマルと猫のシロは、お花畑と食堂を開き喜ばれたが小鳥のチイは預かったお金を穴に埋めたまま??」というふうに教えられてきました。

ところが、この考え方は全く間違っていて、イエス様の話を真正面から受け取っていない、という批判が、田川さんや最近の新約学者の人たちから起こっています。この主人は、神様のことを譬えているのではなく、悪徳の大金持ちの話であり、土に埋めた人の方が、まだ良心に従った、まともな人だ、という考えが言われるようになりました。

1タラントンは、聖書の終わりに付録でついている度量衡および通貨という所を見ると6000ドラクメに相当し、1ドラクメはギリシアの銀貨で、デナリオンと等価、という

ことになっています。1デナリオンは、ぶどう園の労働者の警えにも出てきましたが、ローマの銀貨で、1ドラクメと等価、となっています。つまり1タラントンは、6000デナリオンということになります。わかりやすいように、日本円に換算すると、1日働くと、外国ではもっと最近は賃金が高いのですが、日本では1万円としましょう。つまり、この主人は、3人の僕に、3億円、1億2000万円、6000万円を預けた、ということです。イエス様がこの警えを話された時、聞いていた人は、自分たちをこの話に出てくる僕の立場に置き換えて聞いていたでしょうか？ タラントンのことについての聖書辞書などを見ると「このタラントンの額はあまりに大きいので日常生活では使われていなかった。」と説明しています。そしてその莫大な財産を2倍にする、というのは、普通の仕事では不可能です。これは悪徳の大金持ちが、自分の会社のエリート社員に、人に土地を担保にして金を貸し、返せない時に、その土地を取り上げて財産を増やしたという話なのです。そのことが、金を土に埋めた人の発言で想像できます。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠して／おきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』そして、主人もその批判に対して反論していません。

イエス様は周囲の庶民たちに、世間の金持ちたちが、如何に悪いことをしているか、とこのたとえ話で、世間を批判しているのです。才能を活かしなさい、という話ではなかったのです。そしてこの主人の発言は、神様の裁きとは全く関係ないのです。

(6) イエス様はフーテンか？

「寅さんとイエス」の著者、米田司祭は、日本語の辞書から掘り起こして、「フーテンの寅さん」のフーテンを次の2つの意味で理解しているとのことでした。①定職というほどのものを持たず、ぶらぶら暮らしている者。②既成の社会秩序からはみ出した言動をする者。ところが、この分厚い本を通して、イエス様がこの二つに重なると同時に、二人にはもう一つ、本来の「風天」、元来インド神話から来ており、風の神で、名誉・福德などを与える、そんな存在感を感じてほしいと言うのです。

福音書は、最初にも書いたように、本来のイエス様の姿が、福音記者によって脚色され過ぎていますが、ところどころ本来の姿を垣間見ることができるところがあります。

たとえばマルコ3：20～。イエス様のことについて「あの男は気が変になっている」といううわさで、身内の人たちがイエス様を取り押さえに来た話があります。これなどは

寅さんの①②を連想させる話でしょう。また、ルカ7：34では「人の子（イエス）が来て飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』という世間の評価が現れています。ヨハネ2章のカナの婚礼でぶどう酒を増やした話も、実際は招待などされていないのに、イエス様が数日前に弟子になった者たちを連れて披露宴に来て、予定外のお客が大酒を飲むので、ぶどう酒が足りなくなり、マリアさんは息子たちを叱りつけたのがもともとの話のように思えるのです。

残りの紙面を使って、先ず米田司祭の説明を引用します。

『「寅さんの場合 —— フーテンの寅」の項目で詳述した、「フーテン性（I） —— 常識をはみ出した者」としてのフーテン性は、まさにイエスにも適合する。イエスの取税人や罪人、そして遊女らとの会食や語らいは当時の常識を逸脱していた。特にイエスが生きた時と場において、食事を共にするということは決定的な意味を持っていた。食事を一緒にするということは、友情や団結、そして和解のしるしであり、金銭よりも威信を最大の価値観に据えていた当時の人々にとって、自分より低い階級や身分の人たち、とりわけ社会から排除された人たちと一緒に食事をするのは、たとえ礼儀からであってもあり得なかった。』

そして、米田司祭は田川さんの本も引用していました。

田川建三さんは『イエスという男』の中で、

『どうもこの男、人の家に招かれて飲んだり食ったりわいわい楽しくやるのがひどく好きだったらしい。それらしき場面は福音書でも時々言及されている。イエスにはどうしても、苦虫をかみつぶして、何曜日と何曜日は断食し、などとやることはできなかつただろうし、まして、荒野に出て行って蝗（いなご）や野蜜で禁欲生活に生きぬくヨハネなど、尊敬はしても、自分の生き方としてはとらなかつただろう。・・・町や村の敬虔ぶった顔役衆は、イエスのように、働く時にはやたらとよく働くかもしれないが、人が敬虔な顔をして祈ったりする時刻に、楽しげにそぞろ酔いの陽気な声を弾ませたりされたのでは、文句の一つや二つも言いたくもなつただろう。』

と述べているが、ほろ酔い気分ですら誰とでも陽気に語っているイエスの姿や、その周辺の光景があたりと目に浮かんでくる。

イエス様のフーテン性が少しは説明できたでしょうか。次回は、私たち聖公会の信仰生活に与えられた、祈禱書の意味などを考えたいと思います。